

情動制御の脳内物質、働き解明 山口大教授ら

▽「精神疾患 新薬開発に期待」

山口大と東京農大の研究グループは4日、脳の細胞内のタンパク質の量と質を一定に保つ物質が、脳神経の発達や情動面の発達に重要な役割を果たすことをマウスの実験で実証したと発表した。「不安障害など精神疾患の病態解明、治療薬開発への活用が期待できる」としている。



内田周作助教



渡辺義文教授

山口大大学院医学系研究科の渡辺義文教授(59)、内田周作助教(33)たちのグループ。細胞内にある「熱ショック因子」と呼ばれる分子の一つ、「HSF1」に着目し、HSF1を持たないマウスの神経細胞や行動パターンを調べた。

その結果、不安、攻撃性など情動の制御にHSF1が重要な役割を果たしていることを確認。生後間もない段階で脳内のHSF1が正常に機能したかどうか、その後の発達に大きく影響することも分かった。

同グループは「幼少時の虐待などの環境ストレスや、遺伝的要因でHSF1の機能に異常が生じると脳や心の発達に影響を及ぼす可能性がある。HSF1の機能を高める薬の開発で改善が期待できる」としている。研究成果は米国科学アカデミー発行の総合学術雑誌「PNAS」の電子版に掲載される。(藤田龍治)